

研究課題	神経発達症の学生における疲労度やストレス量の可視化が修学に及ぼす影響に関する事例的研究				
氏名	青木 真純	所属	障がい学生支援室	職名	講師
APRIN e-ラーニングプログラムの受講 <input checked="" type="checkbox"/> ←受講済の場合はチェックをすること					
【研究成果の概要】 （文字の大きさ9ポイント・字数800字～1600字程度）					
1. 研究の背景と目的					
<p>神経発達症者は、セルフモニタリングの困難さから、ストレスや疲労に気づきにくく、そのことが、体調不良や職場不適應の原因となりやすいことが指摘されている（障害者職業総合センター，2014）。本研究は、神経発達症の学生におけるストレスや疲労、不安へのセルフモニタリングの弱さを、ウェアラブル端末の使用を含め、ストレス量や疲労度、不安の度合いを可視化することで補い、それに応じた対処法を事前に準備するといった教育的介入が、修学上の不安や物事の取り組み方に、どのような影響を与えるかを複数の事例を通して明らかとすることで、このような介入が安定的な修学をサポートするための一助となるか検討することを目的とした。</p>					
2. 方法					
<p>対象は、自閉スペクトラム症（ASD）、あるいは注意欠如多動症（ADHD）いずれかの医学的診断のある大学生4名とした。なお、本研究は、本学倫理委員会の許諾を得て行われ、いずれの対象者においても、口頭ならびに書面での同意を得た。</p> <p>教育的介入に先立ち、その効果を評価するために、不安やセルフモニタリングを評価するための自記式の質問紙検査を介入の前後に実施した。介入は、2-3ヶ月の間に対面、あるいはオンラインで3-8回行われ、毎回の介入では、ストレスや不安を感じる場面について、ウェアラブルデバイスで記録される生体情報や、その場面で生じる身体症状や行動等をもとに数値化し、それに基づく対処法を対象者と一緒の実現可能な方法を考案してワークシートに記録した。次回介入時に、その対処法を使用した場合には、それがうまくいったかどうかを含めて、確認する機会を設けた。</p>					
3. 結果と考察					
<p>本研究では、ポストテストまで実施できたのは、4名のうち3名であった。介入時の様子として、いずれの対象者もストレスや疲れ、不安の高まりを低く見つめる傾向が見られたが、回を重ねていくと、ワークシートを参照しながら、ウェアラブルデバイスで記録される生体情報や、その場面で生じる身体症状や行動を参考に、自分自身でストレスや疲れ、不安の状態をモニタリングし、現状が対処すべき事態であるかどうかを含めて、判断することもあった。</p> <p>いずれの対象者もプレポストで、質問紙検査の結果が大きく変動することはなかったが、介入時の様子から、対象者のストレスや疲れ、不安についてのセルフモニタリングを一定程度促す可能性があることから、安定的な修学のために必要なサポートであると推察された。</p>					
【研究成果発表方法】					
上記について、関連する検討を更に行った上で、特別支援教育あるいは高等教育関連の学会における学会発表や論文投稿を行う予定である。					

※発表論文名（口頭発表を含む）、氏名、学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入すること。

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。

なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。